「今日の説教、聴き手のために」　2013/1/27　明治学院教会（301）

（このプリントは毎週作っているものです）　牧師　岩井健作

「中風の人を四人で運ぶ」　マルコによる福音書２章１節ー１２節

選句「イエスはその人たちの信仰を見て中風の人に、『子よ、あなたの罪はゆるされる』と言われた。」(5)

1、今日の聖書の箇所は「中風の人をいやす」という表題の「イエスの奇跡物語」です。誤解を恐れずに、非常に単純に言ってしまうと、イエスは「**建て前からものを考える人**・律法学者」を厳しく批判し、「**現実からものを考える人たち**・身体麻痺の患者（田川訳）と苦労して一緒に生きている人たち」を励まし希望を与えたという物語です。聖書を読むと、「律法」がどんなに厳しい建て前だったかがよく分かります。その尺度に、人間の生死を合わせねばならなかったのです（マルコ 2:27f,14:62)。９節「罪は赦された」と「床を担いで歩け」の表現に徹底してこだわる律法学者を厳しく批判します。イエスが病人を癒すために「罪の赦し」に言及したのはこの時だけです。不治の病は罪の結果だ（ヨブ記 4:7）などと、本人にもそう思わせ、現実の出来事に宗教的意味を付して苦痛を倍増させるなど、そういう権力を使う律法学者に心底怒りをこめて批判したイエスの姿が見られます。イエスの「人の子は・・・・」の発言を、田川は「人間というものは自分たちの世界で生じる罪を自分たちで赦す権限ぐらい持っているのだ」と言う意味にとります。「人の子」には、イエス自身を指すいみと、一般的に「人間」を指す意味とがあり、この理解も可能です。さて、現代人の生死をも左右している「建て前」とは何でしょうか。知識と地位をひけらかして建て前をもっともらしく語る人間には、イエスに倣って本当に怒りをぶつけましょう。また、私たちにも建て前で生きている時があるのではないか深く思考を巡らせ反省したいと思います。

2、「身体麻痺の患者が４人の者に担われ連れてこられた」（3 節、田川訳)。なぜ、マタイは「人々が」、ルカは「男たち」と、と元資料のマルコの「四人」を外してしまったのでしょうか。また新共同訳は「男」と訳すが、原語は中性名詞だから田川訳、岩波訳の「者」がよい。四人は家族や近所の人で女性が入っていたかも知れません。「担われ連れてこられた」(非人称３人称複数も表現はマルコの特徴)には、「運んできた」より自然な感じが出ています。つまり、障がい者と共に生活することが当たり前の様子です。「ノーマライゼイション（障がい者が地域で普通に生活すること)」が板についているような感じが出ています。５節の「信仰」（ピスティス）は、特定の信仰箇条を意味しません。屋根から下ろす知恵や熱心を含めて「神の恵み」への信頼です。四人で運ぶという当たり前の、日々の振る舞いを支える恵への信頼です。

3、「私がいまもっとも誇らしく思うことは、障害を持つ自分の息子に、decent（ディセント）な、つまり人間らしく寛容でユーモラスでもある信頼にたる、そのような人格を認めることです」（大江健三郎『人生の習慣』1992)と言っています。かれの文学の底には息子との共生が滲んでいます。イエスの「奇跡」は、この共生に示されているのです。イエスの言葉「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」は、彼に大きな励ましを与えました。今まで受け身だった生き方が、能動に変わったのです。「皆の見ている前を出て行った。」彼は、寝たきりから decent（かなりりっぱな）な人間に変えられたのでした。